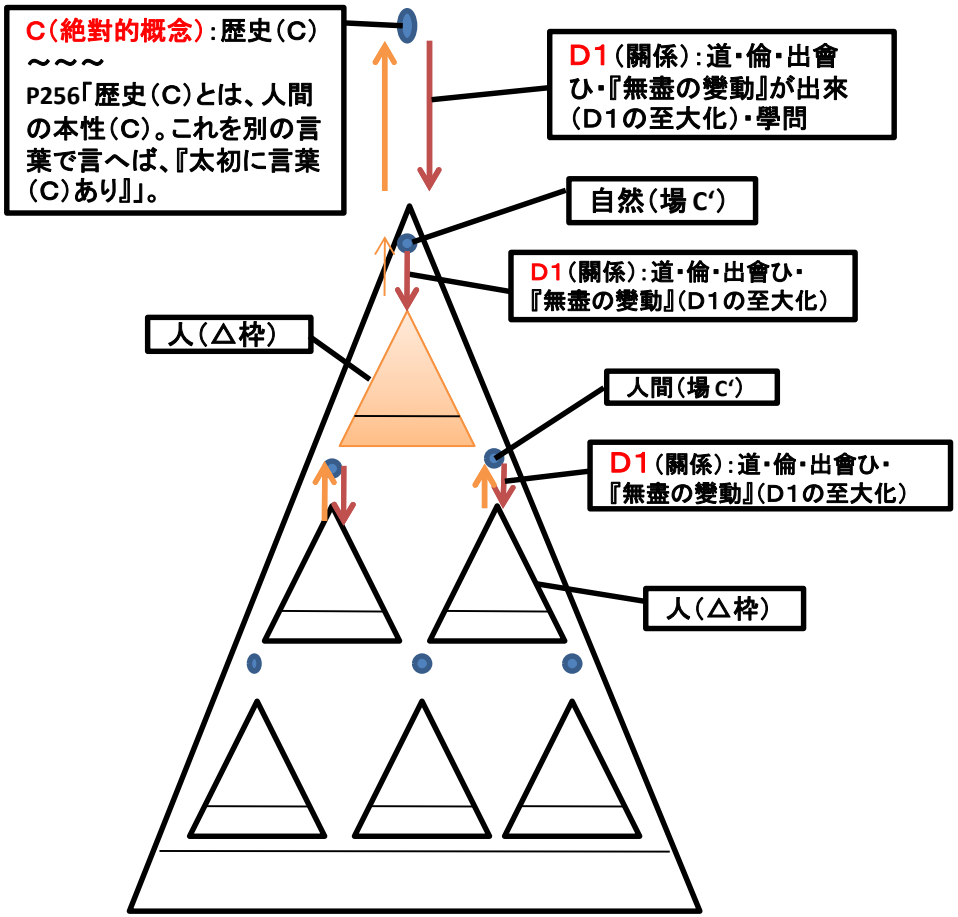
著『歴史』P250:「『無盡の變動』(D1の至大化)が出來するところに歴史(C)がある〔即ち、歴史(C)⇒各場各場の集合としての『無盡の變動』的『出合ひ』(D1の至大化)と言ふ事〕。
＊「道(D1の至大化)の問題が、この出會ひ(D1の至大化)に(『統名』として)集中〔『無盡の變動』(D1の至大化)〕するものなら、〔即ち『各人(△枠)千差萬別の『出合』の総括的な表現が道(D1の至大化)』であるが故に〕、『學問(D1の至大化)は歴史(C)に極まり候事に候』と徂徠が言ふのは當然な事」。
＊「生物(場C')進化で、或る種(場C')から新しい或る種(場C')が生まれる(D1)のは歴史事件(場C')であらうが、両者は、少しも互ひに理解し合ふ(出會ふ？:D1の至大化)事はない」。
＊「化石(資料:場C')には、ピラミッド(C的)のやうに、他人の過去(C')であるとともに私達の現在(C')である〔即ち、P255:『過去(場C')は現在(場C')に生きている(D1の至大化)と言ふ』(つまりは、『學問(D1の至大化)は歴史(C)に極まり候事に候』と言ふ)〕やうな性質がない」。それ故に、自然の歴史とは『假名』にしか過ぎないのだと。



著『歴史』

P250:「『理(E:ことはり・おさめる・理由・道理・理窟)とは、事物に皆自然に之れ有』る〕やうな次第で、自然(場 C')と人間(場 C')とは離す事は出來ないが、両者は、それぞれ、その『倫』(道的概念:D1の至大化)を異にする〔即ち自然(場C')の道(『倫』:D1の至大化)・人間(場 C')の道(『倫』:D1の至大化)の如く〕、その秩序を異にする(D1の至小化)もので、両者(F)を一丸となすが如き原理(E)は空想に過ぎない(Eの至小化)」⇒「さういふはつきりした考へ(D1の至大化)が徂徠(△枠)の思想(D1の至大化)にあつた」⇒「両者は一丸とはならない、両者は、彼に言はせれば、『出合ふ』(D1の至大化)〔つまり、自然(場C')⇒『出合ふ』(D1の至大化)⇒人間(△枠)〕のである」⇒「この『出合ひ』(D1の至大化)が、人間の生活經驗(D1の至大化)の基本形式(D1の至大化)であり、これに人(場C')と人(△枠)との出會ひ(D1の至大化)が加はり、『無盡の變動』(D1の至大化)が出來するところに歴史(C)がある〔即ち、歴史(C)⇒各場各場の集合としての『無盡の變動』的『出合ひ』(D1の至大化)と言ふ事か？〕」⇒「道(D1の至大化)の問題が、この出會ひ(D1の至大化)に集中するものなら、『學問(D1の至大化)は歴史(C)に極まり候事に候』と彼が言ふのは當然な事である〔参照:P243「各人(△枠)千差萬別の『出合』(『接觸』・關係D1)の総括的な表現が、『道』(D1の至大化)」〕」⇒「従つて、彼(徂徠△枠)の考へによれば、もし自然(C')の道といふ名が假名(D1の至小化)なら、自然(C')の歴史(C)といふ名も假名(D1の至小化)に過ぎない」⇒「彼の古文辭學(D1の至大化)の根柢にあつた、このはつきりした哲學的直觀(D1の至大化)は、今日も猶興味ある問題であらう」⇒「今日、歴史(C)とは何かと言ふ反省(D1の至大化)は、哲學者(△枠)の問題であり、歴史家(△枠)の關知するところではない(D1の至小化)と言つてゐるやうな歴史家(△枠)は、よほど鈍い或は怠慢(D1の至小化)な歴史家(△枠)であらうし、反省(D1の至大化)が始まれば、徂徠(△枠)が徹底的に考へ拔いた(D1の至大化)ところを避けて通るわけにはいかないからである」。

P256:「人間といふ種(場 C')は、何も歴史(C)を持つのが目的(D1)で、地上に生活(D1)し始めたのではあるまい。だが、生活(D1)する事が、即ち道具を發明(D1の至大化)したり、記念碑を建てたり(D1の至大化)する事(本性的行爲？)〔その意味でも『過去(場 C')は現在(場 C')に生きている(D1の至大化)』と言ふ事〕だつたとすれば、歴史(C)とは、人間の本性(C)の事だと言つて少しも差支へないわけだ。これを別の言葉で言へば、太初に言葉(C)あり、といふ事になるのではなからうか」。